**第40回大会　セッション「ヒュームとスミス」（スコットランド啓蒙思想研究）事後報告**

報　告　柘植尚則（慶應義塾大学）

　　　　篠原　久（関西学院大学名誉教授）

世話人　篠原　久

合評会：　田中秀夫『スコットランド啓蒙とは何か――近代社会の原理――』

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ミネルヴァ書房、2014年6月刊（xii+325+15）

セッション趣旨

　デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスを中心とする「スコットランド啓蒙思想」の

（継承・影響関係をも含む）「多面的研究」が本セッションの主要テーマであり、これまで

の社会思想史学会では「プーフェンドルフの政治思想」、「ヒュームの政治思想」、「ヒューム

の経済思想」、「ジェイムズ・ステュアートとスコットランド」、「アダム・スミスの法学講義」

（AノートとBノート）等の報告がなされてきたが、今回は前2回の「合評会」形式に引

き続き、同形式として上記の近刊書をとりあげた。

柘植尚則氏による報告（発題）

　「スコットランド啓蒙における＜道徳哲学＞」という観点から、本書で繰り返し登場する

キ―ワードをめぐって、以下の3点について質問する。

1. 「自然法思想とシヴィック・ヒューマニズム（共和主義）の関係、そしてその両者とポ

リティカル・エコノミー（経済学）の形成との関係が、ケンブリッジに集まった思想家たちによって鋭く問題にされた。･･･経済学はそれ自体新しい知の枠組みである。その新しい知の枠組みの形成過程は、なお究明の余地があるけれども、伝統的な自然法学とシヴィック・ヒューマニズムとの対決・総合を不可欠の媒介項として持っていた。政治的思考としてのシヴィック・ヒューマニズムと法学的思考としての自然法学の衝突を媒介にして成立した経済学は、パラダイムの転換の遂行として成立したのである」（122頁、318-19ページ）、指摘があるが、この引用文での、「自然法思想」、「シヴィック・ヒューマニズム（共和主義）」、「商業ヒューマニズム」、「ポリティカル・エコノミー」の相互関係を具体的に、どのように理解すればよいのか？

２）「啓蒙思想の流れは十八世紀の中葉に、無時間的な自然法思想から時間的な文明社会論、文明社会史へと転換しつつあったが、ハチスンはマンデヴィルなどと同じく、その直前にいたのである。･･･ファーガスンは、モンテスキューの圧倒的な影響下にあって、道徳哲学に歴史的考察を導入することによって、また「文明社会」の概念を彫琢することによって、社会認識の新次元を切り開くとともに、社会学の創意者の一人となった」（69頁、161頁）との指摘があるが、「自然法思想」から歴史理論」（文明社会論、文明社会史）への転換を、啓蒙思想の展開途上にどのように組み込むのか、またその具体的な「転換」過程をどのように理解すればよいのか？　社会契約説の形成・展開（ホッブズ、ロック）、倫理学における心理学的展開（シャフツベリ、マンデヴィル、バトラー、ハチスンなど）は、歴史理論への展開に影響しなかったのか？

３）全体的な視点として、「＜道徳哲学＞の展開のなかで、倫理学＜狭義の道徳哲学＞はどうなったのか」という問題を提起したい。十八世紀における「感情論」の興亡（ハチスン、ヒューム、スミス）そのものを、著者はどのように位置づけているのか？　また、「コモン・センス学派の興隆」（197頁）、「哲学から科学へ」（225-229頁）という指摘があるが、コモン・センス学派（リード、D. ステュアートなど）の興隆を＜道徳科学＞への志向として捉えてよいのか？

篠原　久による報告（発題）

1. 第1章における「恩顧」（Patronage）と「啓蒙」をめぐって。

「第三代アーガイル公爵こそ、スコットランド啓蒙の最大のパトロンであった」（26頁）

との指摘は、ロジャー・エマスンの研究を踏まえた新しい視点であるが、第6章での指摘――「巨大な利権がからむ恩顧を配分する権力者の寡頭制支配をスミスがどの程度まで許容できるかという疑問は残るであろう」（154頁）――との関連で、ジョン・ミラー（第10章）における「急進主義」と「恩顧」（への相対的無関心？）との関係への言及があれば「潜在的テーマ」としての「恩顧と啓蒙」という視点が鮮明になるのではないか？

1. 第6章における「アダム・スミスと共和主義（シヴィック・ヒューマニズム）との関係

を巡って。

　本書で強調されている「自然法学とシヴィック・ヒューマニズムという二つの伝統の交差点に位置するものとしての18世紀スコットランド啓蒙」思想という著者の視点には同感しうるが、スミスのなかに共和主義の要素を重要なものとして位置づける著者の考えには、スミス思想体系における『道徳感情論』の位置づけ、とりわけ第6版第6部での「実践道徳論」の重要性に鑑みて、大いに再考の余地がある。スミスの「修辞学・文学講義」での主要な考察対象であった「性格論」（個性への関心）は、この「実践道徳論」での”prudent man”, “proud man”, “vain man”の類型的性格論として展開され、これらは「商業社会」でのコミュニケーション論として提示されているからである。また、第９章で指摘されている「ヒュームとスミスの経済学とリードの議論との間に見られる巨大な懸隔」としての「自然法学の枠組みの解体」（260-61頁）作業の一端は、このスミスの「実践道徳論」のなかに見られるのではないかと評者は考えているからでもある。

1. 第8章と第９章における「トマス・リードの哲学」をめぐって。

　この二つの章で論じられている「リード論」は、ホーコンセンがアバディーン大学キングズ・コリッジ所蔵のリード草稿類から編集した「実践倫理学」とそれに付されて編者の「序論」に基づくものである。この”Practical Ethics”によって、伝統的な「三義務論」を土台としたリードの「自然法学」体系の一部が把握されるようになったが、彼の「理論倫理学」の内実を理解するには、リードの刊行された著作としての『人間の能動的力能論』の検討が必要ではないであろうか。ここには、スミスやミラーとの思想とは異質の「倫理学」が展開されているからである。

４）「スコットランド啓蒙」の総括者としてのドゥーガルド・ステュアートをめぐって。

　第8章には「1758年に≪コモン・センス革命≫が」起こり、「この年に･･･エディンバラ大学の道徳哲学の講義で、D. ステュアートがコモン・センス哲学を普及し始めた」（226頁）との指摘があるが、本書ではリードとステュアートによる「スコットランド≪コモン・センス哲学≫」への関心は薄く、この哲学のスコットランド道徳哲学における位置づけという配慮も見られない。近年、ウッドをはじめとする研究者により、「スコットランド学派」という用語、そして実質的には「スコットランド啓蒙」という概念の創始者としてのドゥーガルド・ステュアートという視点が強調されている。彼はリードの哲学とスミスの経済学の継承者であり、ウィリアム・ロバートスンを指導者とする「スコットランド教会穏健派」の19世紀初頭の変貌（反動化）にも注意を向け、同時にスコットランド啓蒙を代表するこれら三知識人の最初の本格的伝記を刊行することによって、「スコットランド啓蒙」を総括したのである。本書『スコットランド啓蒙とは何か』は「スコットランド啓蒙の最大のパトロン」であった第三代アーガイル公爵から始められている。本書の末尾として、スコットランド啓蒙の総括者D. ステュアートに一章があてられてもよかったのではないか。

著者からの応答

　柘植報告の第一論点（自然法思想、共和主義、経済学の関係）については、「シヴィック・ヒューマニズム」と「自然法ヒューマニズム」の発展形態としての「商業ヒューマニズム」という概念から解釈が可能であると思われる。18世紀になると、シヴィック・ヒューマニズムは社会の安定性を求めて、農業や商業に注目していった結果、農業ヒューマニズムや商業ヒューマニズムが登場する。自然法思想のなかで育てられたヒューマニズムもまた、スコットランドの道徳哲学のヒューマニズムに継承された。商業が人間の情念と行動を穏和にし、洗練させるという側面に注目するのが「商業ヒューマニズム」である。

　第二論点の歴史理論（文明社会史）の形成過程については、スコットランド啓蒙思想家全般は、「社会契約説」を採用していないので、この方面からの影響は少ないと思われる。「倫理学における心理学的展開」による歴史理論への影響問題と、第三論点（「道徳哲学の変容のなかで倫理学」の問題、および「コモン・センス哲学」の位置づけという問題）に関しては、著者の今後の課題としたい。

　篠原報告の第一論点（恩顧と啓蒙）については、そもそも（スコットランド）「啓蒙」活動そのものが「恩顧」がなければ成立しなかったという点を十分に認識しておかなければならない。第二論点（スミスと共和主義）に関しては、柘植報告の第一論点への応答で指摘した「商業ヒューマニズム」解釈がここでも有益であろう。スミスにおける共和主義を過小評価する篠原解釈については、見解の相違としか言いようがない。第三論点の「リード哲学」と第四論点の「コモン・センス哲学」については、柘植報告の第三論点とともに、今後の課題としたい。

　フロアからの発言としては、啓蒙思想における経済学の位置づけをめぐって、有江大介氏と水田洋氏より質問とコメントがなされた。

なお、当日の出席者は約20名であった。　　　　　　　　　　　　　　　（文責　篠原　久）